京都の民主運動史を語る会
会　報
2022年9月20日
第256号
（隔月刊）
題字　住谷悦治

燎原

燎　原　社
（京都の民主運動史を語る会）
代表　井口和起
事　務　局
京都市左京区高野東開町1-23
第三住宅33-302　井手幸喜
〒606-8107
tel & fax075（722）3823

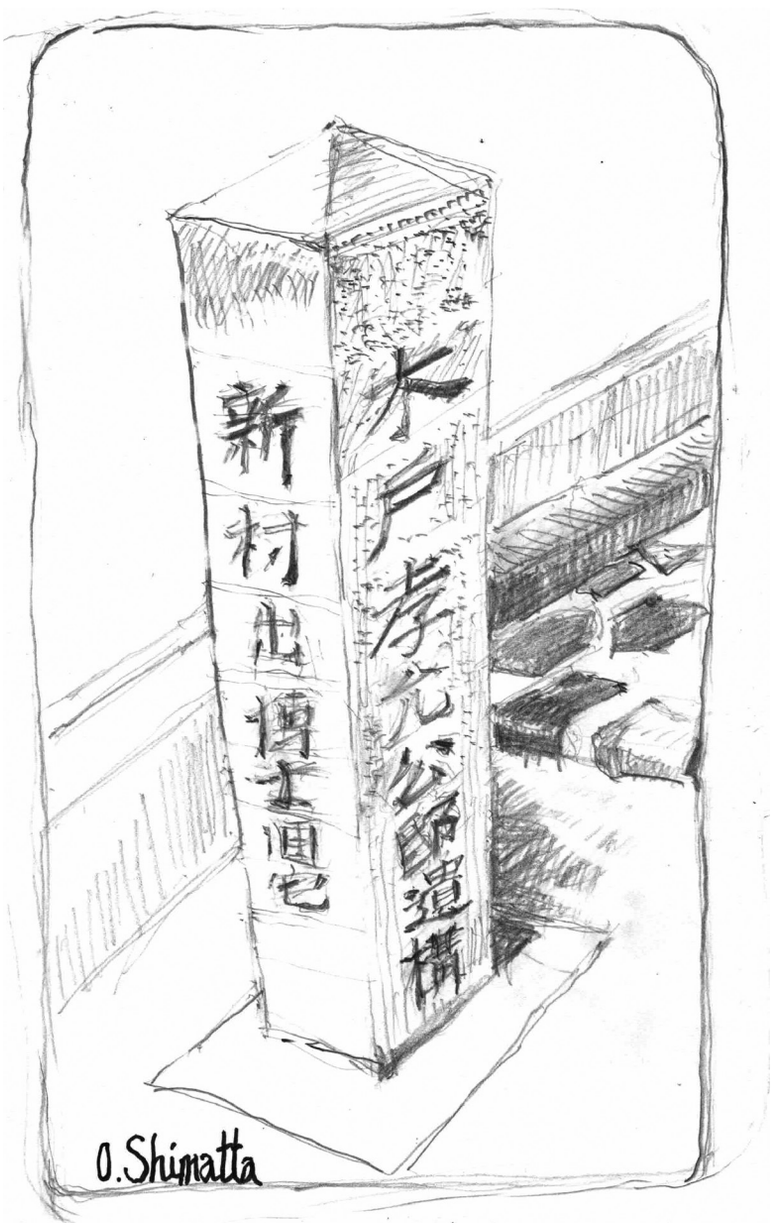
石に刻まれた文言と見えない文言

重山文庫前の碑

（北区小山中溝町）

明治維新の元勲だった木戸孝允が引退し、京都に移り住んだ折の旧邸門構えの遺構と石碑の側面に刻まれている。玄関の石碑の正面には「広辞苑」の編者・新村出（しんむらいづる）旧宅としるしてある。死角の側面には、来訪者はどんな記憶を呼び起こすのか。刻まれていないが、刻み込まれうる「歴史的事実」もある。

（2面へつづく）



スケッチ・奥西正史

京都の民主運動史を語る会22年度総会・松宮孝明氏・報告への感想と意見
「国葬」問題からみる「学術会議会員任命拒否事件」　丹羽　徹　2
問題提起「日本学術会議会員任命拒否事件の現段階」を聞いて　宮澤　正男　3
追悼　井上吉郎さん
友・井上吉郎君の死を悼む　鈴木　元　4／ありがとう井上吉郎さん　湯浅　俊彦　6
嵐電・北野白梅町駅前でお馴染み　井上吉郎さんの「無言宣伝」　出渕ときこ　6／遺作となったブックレット『人生の伴走者』　8
タカクラ・テル物語［第三回］　小田切明徳　8
余滴　『観光コースでない京都』を書いて、撮って　本庄　豊　11
例会案内／編集後記　12

【京都の民主運動史を語る会】年会費（会報代とも）3,000円　郵便振込口座　01060-7-15762　加入者名　燎原社

（1面から続き）

ここは、戦後の一時期を画した「自由大学運動の京都版」だった京都人文学園発祥の地だ。新村出の次男・猛は、1937年の「世界文化」・隔週刊紙「土曜日」・「学生評論」などが、いわゆる「京都人民戦線事件」として治安維持法違反に問われた。新村はフランスの人民戦線運動に反戦反ファッショの立場から共鳴していたのだ。治安維持法により懲役3年執行猶予5年の判決となり、保護観察処分の身となった。敗戦後、二度と戦争を起こさせないようにするため、まともなヒューマニズム教育の必要を呼びかけ、京都人文学園の設立に至った。

私にとっても個人的な発見があった。京都人文学園研究家の山嵜雅子さんのまとめた人文学園の課外講義一覧によると、「昆虫生態学」・講師渋谷寿夫の名前だ。たぶん、学園主事の佐々木時雄が引っ張り出したのだろう。旧制大阪高校・京大のつながりだ。社会性昆虫群の研究のホイラー著「昆虫の社会生活」（1941年4月刊）の訳者だった。もちろんこの一冊が本棚にあれば「社会」の文言だけで不穏文書扱いされたあの時代だ。つらつらそんなこんなをおこさせる百科事典の「広辞苑」編者を顕彰する「重山文庫」がここにある。

（文・佐藤和夫）

京都の民主運動史を語る会22年度総会報告「日本学術会議任命拒否事件の現段階」

松宮孝明氏・報告への感想と意見

「国葬」問題からみる「学術会議会員任命拒否事件」

丹羽　徹（龍谷大学）

世論調査によると半数以上の国民が反対するなか安倍元首相の「国葬」が強行されようとしている。この「国葬」については、国民の思想・良心の自由に反する、安倍元首相と特別扱いすることは平等原則に反するなど、日本国憲法に違反するものであると批判がなされている。また、「国葬」に関する法的根拠は、「国葬令」が日本国憲法のもとではその存在が否定されたにもかかわらず、内閣府設置法にある「儀式を行う」との規定をその根拠としているが、そもそもその規定は、他に具体的な儀式の定めがあってその所管として内閣府が扱うことを定めているに過ぎない。したがって、その規定を「国葬」の根拠とすることはできない。もちろん「国葬」が行われることそのものがもつ意味も問題となる。この「国葬」問題をみてみると学術会議会員任命拒否の際に用いられた手法との共通点がある。

2020年10月、日本学術会議の新たな会員が任命されたが、6名は任命されなかった（この件に関する詳細は、会報255号に当事者である松宮孝明氏の「日本学術会議会員任命拒否事件の現段階」を参照されたい）。学術会議会員の改選は、210名を3年ごとに半数改選するので、1年後に改選期を迎える。現在の状況は、6名が任命されていない状況にある。この現状は、3年ごとに105名が任命され、会員数を210名とする日本学術会議法に違反する状態である。105名以内を任命するものでもないし、任命できるというものでもない。

また、だれを次期会員にするのかについては、日本学術会議が科学者の共同体として専門知に裏付けられた推薦をおこない、それにより内閣総理大臣が任命することとなっている。内閣総理大臣にはその判断能力がないことを前提として推薦制度が設けられている。105名を推薦されれば、内閣総理大臣はそのまま任命することが学術会議

法の立て付けで天皇の国事行為は、内閣の助言と承認のもとに行われるが、たとえば、国会が制定した法律を公布するのは国事行為だが、そこで法律の内容を内閣が変えることも、公布をしないということもできず、もちろん天皇は公布を拒否することはできない。形式的な行為に過ぎない。

拒否する際に用いられた「公務員の選定罷免権」であるが、これは国民の権利であって、内閣総理大臣の権利ではもちろんない。あきらかに憲法に関する無理解がここにはある。だから、事前に学術会議事務局が、内閣総理大臣には人事によって学術会議に対する監督権があるなどと憲法をゆがめる勝手な解釈を行ったのであり、内閣総理大臣に選択権があるような推薦を求められていたのである。憲法と法律をゆがんだ解釈によって権力を規制するのではなく拡大させてしまっている。これは明らかに立憲主義や法治主義に反する。

これに加えて、民主主義のもとでは、政府が行った行為については国民に説明する責任を負っている。法律上105名を任命することが求められているのであるから、6名の任命を行わなかったことについての説明責任を果たさなければならない。仮に当時の菅首相が99名の名簿しか見ていなかったとすれば、6名の欠員があることを問題にしなければならなかった。6名をはずしたことについて少なくとも内閣府での意思決定過程は明らかにされなければならない。当事者がその理由について開示請求しているにもかかわらず、開示を事実上拒否しているのは法的にもあってはならないことである。国民に対する「ていねいな」説明を岸田首相は強調する。だとすれば、学術会議会員任命拒否についても説明すべきである。すでに任命行為は終わったことだとしても、行政の継続性からそこで行われた意思決定過程を明らかにすることが説明責任ではないか。「国葬」の決定についてもいくつかの理由を並べてはいるものの、なぜ安倍元首相を「国葬」のするのか、など肝心の疑問には答えていない。「都合が悪いところは説明しない」「答えられるところだけを繰り返す」というのが「ていねいな」説明のようである。そうして時間が経過すれば、「国葬」は終わり、次の会員任命の時期が来る。そうすれば国民は過去のことは忘れてくれるだろう、と考えているようにも見える。

2012年に第二次安倍政権が誕生して以降の時代は、「2012年体制」（中野晃一）あるいは「長期腐敗体制」（白井聡）と呼ばれる。政権を越えて、すでに体制になっているという意味である。これは首相が変わったとしても体制であるがゆえにその政治手法が受け継がれていることをさす。安倍首相の下で内閣法制局長官、その後最高裁判事など人事を通した支配を行い、さらに、解釈を通して憲法や法律の枠組みを破壊し、学術会議任命拒否問題では学問の自由を、「国葬」では思想・良心の自由を侵害する。

学術会議問題での焦点の一つは軍事研究のありようにあった。日本国憲法は、軍事に公共性を認めてこなかった。しかし、いま、軍事が前景にでてきており、先制攻撃まで可能とするような解釈を生み出し、防衛（軍事）費への歯止めが利かなくなりつつある。それへの学術の動員が学術会議問題（さらに卓越研究大学など）であり、国民を動員する契機としての「国葬」問題である。

問題提起「日本学術会議会員任命拒否事件の現段階」を聞いて

宮澤　正男
（立命館元職員・「立命館の民主主義を考える会」事務局）

はじめに

今年度の「京都の民主運動史を語る会」総会（6月18日）において、松宮孝明・立命館大学法科大学院教授から標記の問題提起がされました（「燎原」2022年8月10日第255号掲載：全文テープ起こしで分かり易い）。

私は松宮先生が所属されていた法学部事務室に5年も勤務しながら松宮先生の講演を聞いたのは初めてでした。会場は、立命館大学朱雀キャンパス中川会館で、2006年9月の竣工以来、数え切れないほど会館を出入りしながら、法科大学院法廷教室は二度目でした。そんな繋がりで、「忖度」が働いた感想文と思われるより、任命拒否事件や「国葬」問題をめぐる動きについて、松宮先生の問題提起の感想を含め述べさせて頂きました。

1．安倍・菅・岸田首相の無責任な会員任命拒否と杉田和博官房副長官（当時80歳）

この事件は、２０２０年10月１日に発覚し、１年10ヶ月以上が過ぎようとしています。私はこの事件を知った時、驚きと怒りとともに、無派閥を自称し官房長官時代から官僚が作成したメモを棒読みする菅首相が判断したものでないと思いました。問題提起で松宮先生も述べていますが、安倍首相時代からの杉田和博官房副長官が６名を削除した99名の名簿を提供し、菅首相がそれを鵜呑みしたことが明らかになり支持率は12％以上も低下しました。岸田内閣は、「６名は前菅首相の時に決着済み」として、８月３日、学術会議からの６名の名簿再提出を拒否し再選考を求めました。まさに〝安部が湖ね菅が呑み込み岸田が蓋する〟のが今の状況です。

注：杉田和博：神奈川県警察本部長・警察庁警備局長・内閣危機管理監等を経て内閣官房副長官（２０１２年12月～２０２１年10月）内閣人事局長兼務。

2．現行の国の特別機関を維持、会員選考過程に第三者を関与する法案準備

学術会議について、自民党が求めていた「国の特別機関から切り離し、独立した法人格とすること」は見送り、現会員の推薦に基づいて新会員を選出する仕組みを残し、「透明性を高める」と称して選考過程に第三者を関与させる法案を２０２３年度末までに国会に提出するとの報道がありました。この問題の背景には、７年前の安保法制以降の軍拡を進める日本政治の「歴史的文脈」があります。安倍一強政権と云われる中で、官邸主導（独裁）型の政治を進め、「森友・加計・桜を見る会」など国政の私物化は言うまでもなく、腐敗した「忖度」政治の延長線上に引き起こされた事件です。岸田内閣は、「国民の声を聴いて」と言いつつ、軍事研究に反対する学術会議の「骨抜き」を意図しています。

3．元安倍首相の「国葬」判断過程と共通する国会軽視、憲法違反、国民無視の態度

岸田首相は安倍元首相の「国葬」を判断した理由に、①首相として憲政史上在任期間最長（計８年８ヶ月）、②外交、経済等での様々な業績、③選挙中の非業の死に毅然さを示すと述べています。しかし、歴代首相の中で安倍首相のみをこの理由で特別扱いすることは納得できません。内閣の権限で出来る法的根拠もなく、国会の審議も経ず多額の税金を投入することは、憲法違反だと多くの憲法・政治学者からも指摘されています。にもかかわらず８月31日、葬儀委員長の岸田首相は「国葬」当日には「哀悼の意を表するため、各府省においては、弔旗を掲揚するとともに、葬儀中の一定時刻に黙とうすること」と国民に弔意を強制する決定をしています。

まさに、国民が納得する説明責任を果たさない、「学術会議」任命拒否と共通する態度です。国民一人一人が「岸田内閣ＮＯ！」の声を挙げていきましょう！

追悼　井上吉郎さん

友・井上吉郎君の死を悼む

鈴木　元

学生時代以来の友人である井上吉郎君が８月21日に亡くなった。１９４５年８月18日生まれだったので、かろうじて77歳を超えた３日目で少し早すぎる死であった。

私と彼が共同の仕事をしたのは京都市長選挙であった。私は共産党京都府委員会の常任委員として「民主市政の会」事務局担当常任幹事の任につき、１９８９年の京都市長選挙で木村万平さんの選挙を闘い３２１票差で惜敗した。続いてその後継候補者として井上吉郎さんと１９９２年１９９６の市長選挙を闘った。１９９６年の選挙では直前の１９９５年７月の参議院選挙での共産党の比例得票のほぼ倍の２１８４８７票獲得し、得票率差０・９％、実数で４０９２票差で敗れた。これは私の力量不足であり責任を痛感させられた。当選していれば、まことにユニークで個性あふれる独特の市長になっていたと思う。いま振り返っても返す返す残念である。

木村万平さん、井上吉郎さんの二人はまったく異なる気質の人であった。しか両名とも、それ以前それ以降の候補者と根本的に違うところがあった。木村万平さんは居住地である鉾町・百足屋町での町壊しに反対する闘いからはじめて古都京都の景観を守る闘いを続け、その延長として、京都市長選挙に臨まれた。井上吉郎さんも障害者が暮らしやすい町を求めて市民運動を闘い、それを実現するために市長選挙に臨んだ。そして二人とも選挙に敗れても、引き続き住民運動・市民運動に取り組まれた。選挙の数か月前に候補者が決まり、選挙が終わると公約実現のために闘うことなく元の仕事にもどる活動スタイルと根本的に違っていた。選挙にあたって今日京都の共産党と民主勢力が学ばなければならない大切な点だと思う。

井上さんは「一点の火が野を焼き尽くす」の言葉のように、「地下鉄東西線建設での建設費倍化問題」「歪んだ京都市の同和教育問題」のように多くの人が問題にしていなかったり、出来なかった問題を、たとえ一人からでもはじめやがて多くの人の参加を得て運動を広げ社会問題化して行った。そして彼の見識と行動力もあり多種多様な文化人などを推薦者・応援弁士として自ら組織していた。私が家庭の都合で共産党の専従職を辞めた後、井上さんにとって最後の選挙となった２０００年の市長選挙に向けて「革新的保守市政宣言」という本を出版した。しかし共産党はその書名に反対し宣伝も販売も協力しないという対応をした。私は市長選挙とかかわってしかるべき職務について居なかったので「事情も分からない人間が口を出すべきではない」と考えて、あえて動かなかった。井上さんもあれこれ言って来なかった。しかし外から見ていても、彼の個性を尊重し、その力を引き出すことができていない様子がうかがえた。結局７２４９３票差と言う大差で敗れた。選挙、とりわけ執行権を持つ市長や知事などの首長を選ぶ選挙は２分１の得票を取らなければ勝てない。共産党の考える思想・理論・政策の範囲でしか行動できない候補者では当選できないことは明瞭である。このことを教訓として学ばない限り首長選挙での当選を目指した闘いにはならない。

井上吉郎さん　お別れ会にて

井上君と私は育ちも気質も随分違った。彼は府学連、京都生協の活動を通じて目の前にある課題を見つけそれを運動化する点で類まれな資質をもっていて「３６５日マラソンスピーチ」「無言宣伝」などのキャッチコピーを作り機敏に運動化した。私はどちらかというと全局を見渡し戦略的方向を定め、それを文書化し構成員の合意形成を図り全体を共通目標に向かって運動化するのが得意であった。この違った資質を持った二人は、互いの異なる優れた点を認め合って共鳴し、候補者と選挙担当という役割分担のコンビで闘え生涯の友となった。

そんな井上君と私に共通するところは「あくなき知識欲・読書好き」「なんでも文書にしなければ気がすまず本や冊子にする」ことだった。井上君が倒れ，重い障害者になって以降、私は１～２カ月に１回、彼の家を訪ね、彼と多くのテーマで１時間半から２時間話し合ってきた。これは二人にとって知的刺激を受ける至福の時間であった。その成果も生かし私はいくつかの著作を出してきた。その都度開催した「出版を祝う集い」に彼は常連として参加し、挨拶もしてくれた。

彼と時代を共にし、闘いを共有した大学民主化闘争をあらわした「もう一つの大学紛争、全共闘・解同と闘った青春」（かもがわ出版）には、推薦文を掲載してもらった。しかし２０２０年から始まったコロナの流行は彼の家への訪問が出来なくなり、二人の「研究会」も途絶えてしまった。私は今年の４月に彼が期待し待ち望んでいた「ポスト資本主義のためにマルクスを乗り越えて」（かもがわ出版）を出版した。それを祝う８月７日の京都の集いは、井上君は厳しい暑さとコロナの再流行のため参加出来なかった。そしてこの本の東京での集いが開催された８月21日に亡くなった。ただご冥福を祈るしかない。８月24日午後１時からの、葬儀の前に時間の範囲内で取り急ぎ書きなぐって会場で奥さんの池添素さんに渡した。

８月26日、それを少し補強した。

（国際ジャーナリスト）

ありがとう井上吉郎さん

湯浅　俊彦

長い付き合いだった。とくに私が京都民報社を退職し、かもがわ出版を立ち上げた1986年以降の親友であった。彼が新日本出版社で月刊『明日の農村』を編集していたこともあって、教えてもらうことが多かった。

京都府生活協同組合連合会の専務理事をされていた頃、早朝の学習会に呼ばれ、月一回だったが勉強させてもらったことも忘れられない。

白沙会での加藤周一さんと井上さん

そして私にとって何よりありがたかったのは評論家・加藤周一氏と結びつくきっかけをつくってくれたことである。1989年秋、立命館大学の客員教授に就任された加藤氏の70歳の誕生日を祝う集いを銀閣寺近くの「白沙村荘」で開くことを企画し、30人程が集まった。景色も雰囲気も最高で、加藤氏も上機嫌だった。これらは井上さんの人脈とアイデアで実現した。

この集いは翌年4月から加藤氏を囲む「白沙会」に発展、井上さんが司会したその記録『居酒屋の加藤周一』（かもがわ出版）はベストセラーにも入った。加藤周一と居酒屋というミスマッチの組み合わせが面白く、ここでも井上さんの発想が活かされた。

井上さんは、1993、1996、2000年の京都市長選に連続立候補するも現職に敗れた。1999年秋に著書『革新的保守市政宣言―京都2000年』（かもがわ出版）を上梓したがタイトルをめぐって「赤旗」が広告を拒否するなど物議を醸した。「保守市政」が問題となったようだが、京都では蜷川知事の「反動とは闘うが保守は敵でない」という考えが定着しているのだ。井上さんは「ある面では、極めて保守的な市政こそが、京都のまちには望ましいし、似つかわしい」とこの著書で強調する。

残念ながら井上さんはその後、病いに倒れ、再び市長選に挑戦することはなかった。

市長浪人中にイタリアの革新都市ボローニャ市をツアーを組んで訪ねたことがある。農家民宿に滞在したユニークな旅は忘れられない思い出だ。そして映画「エイジアン・ブルー」の舞鶴ロケや韓国・釜山ツアーなど多くの貴重な体験も。

ありがとう吉郎さん。

嵐電・北野白梅町駅前でお馴染み井上吉郎さんの「無言宣伝」

出渕とき子

エンドレスは未定

雨ニモマケズ 風ニモマケズ 雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ…2013年12月4日から、毎週月曜日の朝、嵐電・北野白梅町駅前で、井上吉郎さんがはじめた「無言宣伝」は、間もなく10年になる。

最初の一歩は、まさに吉郎さん1人だった。7時30分から9時まで。遅刻はない。時間通りに1人で自宅を出る。「抗議！秘密保護法」「殺すな、殺されるな」「×憲法改悪」など、自筆のプラカードを首にかけて。

しばらくして、お連れ合いの池添素さんがiPhoneを持って駆けつけ、写真に撮り、「無言宣伝」終了後に、ブログやFacebookに投稿。それが日本と世界各国に発信される。お2人のこのコミニュケーションがとてもいい。

こうして、吉郎さんの姿が話題になり、新聞報道などされると、やがて「井上さんを激励しよう」「障害があっても井上さんのように、自分もできることをしたい」と、市内各地から参加する人が1人増え、2人増え、その輪が次第に広がった。時には東北、関東、

四国、九州、沖縄など全国各地から。またアメリカ、フランス、スウェーデンなど海外からも。出張や旅行のついでに「せっかくだから井上さんの『無言宣伝』に参加しようと」と、わざわざ前泊をして、月曜日の早朝に間に合わせて来る人も。

それでも基本は「無言宣伝」に変わりはないのだが、「ミニレク」というのがあって、参加者のちょっとした体験報告、イベント紹介などなど、時々の話題提供がある。

また、月曜日が祝日と重なる日だけは「無言ではいられない宣伝」になる。憲法、原発、環境、障がい者問題など、さまざまな市民運動に取り組む人たちの活動報告や訴え、俳優やミュージシャンの路上演奏など、多彩なパフォーマンスが繰り広げられる。

吉郎さんは、それらを楽しんで眺めている。

突如、脳幹梗塞が井上吉郎さんを襲ったのは２００６年。緊急入院先で、素さんは必死で叫んだ。「このままでは死んでしまう！」。吉郎さんは、かすかにその声を聞いたという。

吉郎さんの生命の灯を呼び覚ましたのは、素さんの叫びだったかも知れない。しかし、以来、それまで達者だった吉郎さんは右手右足の自由を奪われ、食べ物を飲み込む機能を奪われ、言葉を奪われた。

それでも吉郎さんが「無言宣伝」を思い立ったのは２０１３年、安倍政権下で浮上した特定秘密保護法だった。戦争放棄をかかげた「憲法」があるにもかかわらず、法案は日本を何時でもどこでも「戦争ができる国」にするものだ。吉郎さんは、法案にいち早く異を唱え、新聞などの投稿で訴えてきた。

しかし、それを訴えようにもマイク宣伝は困難だった。チラシを撒くにも不随運動を繰り返す右手は利かない。

そんな自分にできることは何か―。考えぬいた戦術が「無言宣伝」だった。

法案は同じ月の13日、衆議院で強行可決されたが、吉郎さんは諦めなかった。

今年12月、10年の節目を迎える「無言宣伝」は、吉郎さん亡き後も、集まった仲間が、しっかり遺志を繋いでいる。エンドレスは未定。

「あっ―、飛行機雲！」

真っ青な空に、真っ白い航跡を引く雲を見ると、吉郎さんは決まって歓喜の声を上げた。傍らに座る大きな縫いぐるみのゴリラ（ゴリ君）、ディズニーの人気キャラクター、ミッキーマウスとミニーマウスも好きだった。

写真を撮るときも注文されたポーズに照れずに応えた。ジャンルに関係なく音楽、文学、お芝居、お茶もお菓子も、心から愛した。そんな吉郎さんをみんなも心から愛した。

光る飛行機雲の向こうに吉郎さんを追いかけて―――。

遺作となったブックレット『人生の伴走者』

本書は、この11月3日（文化の日、日本国憲法公布の日）発行を予定されていたが、著者の井上氏は最初の校正と表紙を確認して入院となり、完成を待たずに永眠。遺作となってしまった著者7冊目のブックレットである。

折々の綴られたエッセイ作品「人生の伴走者」「侵略ヤメロ」「京都雑録」と、メインである23冊の沖縄関連書籍を取り上げた「沖縄書評」で構成されている。

知られるように、著者は2006年に脳幹梗塞で倒れ、半身不随の車椅子生活者となった後半生も、障害者分野はもとより広く様々な社会的活動をおこない、発言してきた。

連れ合い池添素さんがあとがきにかえて晩年の様子を記している。

「胃ろうを生きるための道具として使用し、視力が低下する中、2本の蛍光灯の下でたくさんの本を読み、左手の人差し指一本で毎日ブログを更新し、読んだ本の書評をしてきました。一日たりとも生きること、闘うことをおろそかにしない人生だったと思います」。

過去と現在を知ることで未来を展望する。日本を知るためには沖縄をまるごと知る必要がある、という問いかけが鋭く胸を突く。

ウインかもがわ刊、A5判64頁、660円。

タカクラ・テル物語

【第三回】　小田切明徳

山宣倒れるの悲報走る

（中見出しの文責：さとう）

ところで、信州にも「山宣倒れる」の悲報が飛び、10数か所で様々な形で追悼会がおこなわれた。上田の農民活動家の有賀有喜は日ごろから筑前琵琶を嗜んでいた。彼はこの報道を聞き急遽、「嗚呼、山本宣治君」を10日間しかなかったが、上田の追悼会に書き上げた。号は「有賀曲水」、「意（ココロ）は如何に堅くとも、身は撤石に非ざれば、正義の巌ふみしめて、行くや理想の大天地、はばむ巨魁に討たれたる。ああ悲しやの世なるかな、鎌と鉄鎚（テツチ）を振りかざし、階級戦の先陣に、立つ人多きそが中に妻子を忘れ、身を捨てて、一途に進む丈夫よ、ああ、山本君よ、今何処、時は弥生の五日の夜、七生（義）団の黒田奴（メ）が共産党の代議士を辞職せずんば覚悟せと、言葉も荒く威せしを、びくとも揺るがぬ大磐石、わが無産党の代表なり、我言わずとも大衆の声天井にとどろかん。黒田はすきを見出しつ、かくし持ちたる短刀を君が首筋めがけつつ、ぐっとばかりにつらぬきぬ。無念と黒田の袂をばつかめば廊下に引きずられ、続いて突き刺す凶刃にあわれ心臓貫かれ、どうと音して倒れたり。あたりは暗く道遠し。唯ボー然と見つめれば、はるか彼方の茶の畑につつまれたる故郷の我が家の雨戸押し開きむかえ出づるはそも誰ぞ、ああ、子どもらよ我が妻よと、呼ばんとすれど声たたづ、ああ工場の同胞よ。ああ農村の同胞よ、我今死すとも丈夫の正義は死せず永遠に、たのむ兄弟死するとも」

ところで、追悼の琵琶にはもう一曲あった。1929年10月号の『戦旗』の「山宣追悼・プロレタリア琵琶」である。

「洋々と流るる　水はつくるとも
怨みはつきじ墨田川、平沢計七始めとし　震災事件数百の　怨みは燃
ゆる亡き魂は憎しみのみ　焔を燃
やせ影青く　鬼火夜毎に　もゆる

とや。かくて日毎に数を増す　プロレタリアの戦列は　足音高く進み来て　廻す歴史の歯車は、此処に一千九百二十八　春まだ浅き如月に我が国最初の普選なる国会選挙を契機とし　×××××（補注：労働農民党か）は堂々と　全民衆面前に雄々しき姿ぞ、現しぬ。（中略）『例えこの山本宣治は倒るるとも、』とのみ言いて　こと切れし、」

この「プロレタリア琵琶」は峰桐太郎が作り、正木敬二の解説がついたものが、『信州白樺』（30号：山本宣治特集号）に収録されている。峰桐は当時、我流の筑前琵琶の節をつけて唸ったそうだ。

ツウにとって、三月一日に上田での演説が、山宣と直接会うのが最後となった。それを思うと涙がこみあげてつらかった。

以来、上田を中心とする農民の闘いは熾烈となった。

「生命は短し、科学は長し」

翌年の春、山宣の一周忌にあたり上小農民組合連合会では、山宣の記念碑を建てる事を決めた。その場所はタカクラの家の庭とした。その除幕式には多くの組合員が警官の取り巻く中で、赤旗を持って集まってきた。記念碑を飾る文言について警察はクレームをつけた。タカクラが用意したのは山宣の同志であるドイツの反戦生物学者G・ニコライの反戦の書『戦争の生物学』の翻訳本に書かれていた文言だった。

「我々を縛る鎖に強さはいかに　一目見ていかめしくとも、またがんじょうらしいそれもはや所々錆で、くちゆるまんとして居るのを我々は明らかに知って居る。其の鎖を断然切り離そうと試みる有志達のために私は此の書を武器の一つとして献じた。好むにせよ好まないにせよ　やがては来るその日のために」

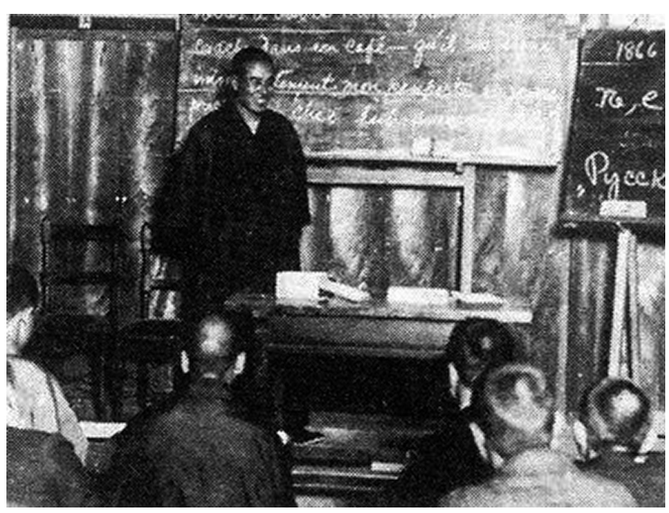
警察はこの文面では墓は建てさないとの姿勢であった。そので、タカクラは妥協せざるを得なくなり、山宣の造語の、「生命は短し、科学は長し」のラテン語を下記のように示した。

VITA BREVIS SCIENTIA LONGA の記

それにしても山宣の記念碑は宇治でも無事ではなく、正面の文字を「花屋敷山本家乃墓」と変えさせられた。全く理不尽なことである。3つめの碑として準備している東京の刺殺された旅館「光栄館」近くの碑であるが、当局は許可していない。

自由大学運動から小作争議のオルグに

さて、タカクラはこの頃から、次第にマルクス主義の思想を深化させた。それによってタカクラを訪れる人は「自由大学」の哲学好きの農村インテリ層が次第に影を潜めて、貧農、小作、水平社出身の農民たちが多くなっていった。当人は書斎で農民に同情して対応するヒューマニストから、実践的マルキストの立場に移行していった。彼は長野県下の小作争議にかけつけては、農民の闘う組織の必要を説き約13の農民組合を作った。この中でタカクラはマルクス主義以外に、この実践に役立つ理論はないことを知っていた。田んぼに地主から立てられた「立ち毛差し押さえ」「立ち入り禁止」の札を抜いて回りながら、レーニンの『貧農に訴える』『何を為すべきか』『帝国主義論』を農民と回し読みをした。創作活動の方は『百姓のうた』を都新聞に連載した。これは諏訪湖周辺の製糸女工の生活を描いたものである。私生活では3人目の子ができたことがわかり、今度は安田の方の母（ツウの実母）がお産のてつだいにきてくれることになった。



上田自由大学で講義するタカクラテル

「結婚のときは着物だったね、こんな良い家におるのであれば、タンスも必要だろう。」

言われてツウは焦った。当座の生活費に追われて、作ってくれた着物は京都の質屋に入れたままだった。結婚後の7年間は着物が必要ではなかった。それでも相変わらず、利子の払いのやりくりが大変であった。久しぶりに出会った母親に余計な心配をかけまいと嘘をついた。

「度々の引っ越しで面倒だから、着物の行李は前の家にあずけてある」

安田の母の手前で、嘘も方便と取り繕った。タカクラも着物の事では気がとがめたようだった。ツウはテルにいった。

「着物の事は私の方でうまくはなしをつけました。」

西塩田の小作争議

1930（昭和5）年9月9日、次男の次郎が生まれた。早産であって600匁（600×3・75グラム＝2250グラムか：文責さとう）の体

重だった。ツウの身体も不調で母乳の出も悪く、赤ん坊は栄養失調であった。そんな赤ん坊を背負って上田の医者に通い、農家のおばさんに母乳を分けてもらいにも出かけた。

テルも赤ん坊の事を大変気にしながら、長野県の三大小作争議の一つといわれた西塩田の小作争議の支援で走り回っていた。この争議の相手の大地主は、あの「未完の三重塔完成」の重要文化財を擁す前山寺の住職の中島栄知だった。この争議は32年3月に小作側の勝利となるまで、あしかけ3年もかかった大争議であった。農民の要求は桑畑5割、田3割の小作料引きであり、その引き下げを粘り強く話し合い続けた。中島らは皇国会なる地主側の思想団体を盾にした。「日農はアカだ」とか、「タカクラらにはロシアから資金が来ている」と言ったデマが飛ばされた。小作組合の切り崩しが続き、緊迫した小作争議であったがその中で「満州事変」勃発がした。1931（昭和6）年9月18日であった。軍部は「満州に王道楽土を作る」と東北地方の冷害、大凶作等の国民の不満を国外に向け、目をそらそうとした。この国策に乗って満州移民が推進された。ところが長野県内には2か村、この国策に反対した所があった。それは上田郊外の青木村と最も南の阿南村であった。阿南村村長の佐々木忠綱は若かりし頃、山宣の「信南自由大学」に参加した。そこで、よく学び、真実を見抜く力や自分で考えることの大切さを掴んでいたから、満蒙開拓の国策の実態を先ず知っておこうと、実際に満州に渡ったところ、そこでは政府の言うのと違って中国人の土地を取り上げている様を見た。そこでこんな所に村民を送ればかえって危ないと思いこの政策に反対した。それと同様に青木村の場合もこの政策に反対して、中国侵略戦争の本質を見抜き『生きて帰れ』の送辞を村長として送っていた。長野は家族移民が全国1位であったが、この村からは、1戸の移民も出さなかったのであった。

さて元に戻り、西塩田の小作争議の後半である。地主側から切り崩しによって、当初70余名の小作組合員は30余名まで減少した。小作料未納付訴訟まで起こされ、双方が全力で対決した。1932（昭和7）年1月2日、村の争議団本部に24人の若者が集まって来てビラ貼りに出掛けた。火の見櫓の半鐘が打たれた。村に緊張が走った。そして地主側が集めた消防団らが刀、とび口、槍などで武装した四百人あまりに囲まれた。皆、決死の覚悟であった。日が暮れ篝火が焚かれた。

警察がトラックで駆け付けた。主な組合員は検束されたので、皮肉にも組合員は命拾いをした分けであった。

さて、この西塩田の情勢を変えたのは小作組合員の奇襲作戦であった。農民たち数十人が前山寺近くの田に集結した。

「おい桜は見ごろだろうよ」

「塔の原の花見に行こう」（季節外れの花見であり、集結の符牒か：文責さとう）

組合員は田の畦道を走って集結した。赤旗を数十本も立てて、デモを仕掛け、「赤旗の歌」を高らかに歌い、静まり返った寺の周辺をめぐり、小作料を負けろ等のスローガンを叫ぶ。

驚いたカラスの群れが杉木立から飛び去った。寺からの通報を受けて警察の1隊が駆け付けた時には、デモ隊は既に2キロ先のタカクラ宅まで行進していた。

小作争議の勝利とふたりの子供の葬儀の悲しみ

他方、タカクラ宅では子どもは危篤になって医者も見放した。タカクラも横を向いて涙をふいた。デモの成功を聞いて赤子の病気を知らせまいと、寝ている部屋の障子を閉めた。庭では炊き出しが始まり、農民たちにおにぎりを振る舞った。彼らは茶碗酒で祝杯を挙げて解散した。この争議の勝利の日、2月25日にタカクラの三女の友が肺炎で死んだ。

夜の九時ごろであろうか、赤子の喉がゴロゴロなり、20分もすると静かに永眠した。ツウはそれまでの5か月の育児を思い出し。慟哭した。

「私の不注意だった。2月の寒い風に当たったため高熱がでて10日患った後、あっけなく死んでしもうた。我が子はまるで生きているよう」

生後、五か月たらず、死に顔に手を触れてみる。ひやりと冷たい。その小さな死体に赤い着物を着せた。おもちゃ箱のような小さなお棺に入れた。

「まだ、親の顔もわからなかったろうね。端正な顔立ち良い子だったのに」

「ゆく春を惜しむ間もなし　闇（トキ）の声」テル

結局、1930年9月に生まれた次男の次郎は栄養不良で生後8か月で失い、ツウはあれこれと思い煩う。温泉のお風呂場で同じ年頃の子どもを見るにつけ涙がこみあげた。そっとお湯に顔をつけ目を洗った。ツウには次の子が出来ていたので、山宣の言う産児制限をやろうとも思いつつ、大分月が立っていたから、産まれ月を待つことにした。ツウは陣痛がきつく長く苦しんだ。

「山の上に登ったかと思うと、今度はぐーと谷底に落ち込んでいく感じがする。その繰り返しでえらい」

テルは前に死んだ子のことを思い出していた。

「あの時、母乳が足らずに懲りたからなあ、他人から乳を貰ったが、今回はヤギを飼おう。そして、ツウが一日二回その乳を飲むようにしてほしい」

こうして、1931年10月30日に、ツウは三女の友（トモ）を産んだ。テルは少し前から「ソビエト友の会」に

関係していた。それをヒントにして名前を友（トモ）にした。

ツウは社会運動で倒れた人、いま招集され戦地に送られて行く若い農民の運命をおもんばかり、頭を垂れる……この美しい子供の思い出は夫婦の中に、ずーと生き続けるとささやき、テルは「子供ふたりの屍を　踏み越え　踏み越え　闘って行く」と都新聞にその心境を発表した。この年、タカクラは長野県諏訪の製糸工場をテーマにした小説『狼』を都新聞に連載した。

テルの二人の子供の葬儀を挟んで、1931（昭和6）年9月18日、日本は満州事変を起こし、中国大陸侵略を本格化して行った。

（つづく）

余滴

『観光コースでない京都』を書いて、撮って

本庄　豊

こんなに反響があるとは思わなかった。

そう思ったのは、平井美津子さんとの共著『観光コースでない京都』（高文研）が出版されてから一か月で重版となったからである。世界的な観光地である京都のなかの、観光コースでないところを見つけるのが企画のねらいだった。企画はコロナ禍の前に始まったが、出版は二〇二二年夏、第七波の真っただ中にあった。もともとこの出版社には『観光コースでないシリーズ』があり、海外版では『観光コースでないソウル』『観光コースでないサイパン』などが先行して書店や図書館の本棚に並んでいた。日本編では、東京、沖縄、広島などのシリーズが始まっていた。

編集者からは「近現代の京都の歴史を書いてほしい」という以外、とくに何の注文もなかった。そうは言ってもどうしようかと悩んでいるとき、手に取ったのが「燎原」だった。「燎原」の表紙に素敵なイラストとともに紹介されていたのは「重山文庫」。「これにしよう」と決めた。重山文庫は『広辞苑』を編纂した新村出の自宅に開かれた資料館である。重山文庫の取材とともに、『観光コースでない京都』を自分としてどう書くか、どう撮るかを何度も考えてみた。資料館を管理する新村恭さんは、『広辞苑』編纂をめぐって祖父・出と父・猛の態度を比較し、次のように書いている。

「出は実務運営は自分の領分ではないとして任せるやり方であるが、しかし商業出版であることも踏まえた大局をおさえることができていた」「一方猛は、理想に向かって強く進むキャラクターで、前向きの推進力をもっていたが、さまざまな立場の人々が一定の予算とスケジュールのなかで共同し、それを統括組織するのは逆に不得手の質(たち)であった」（新村恭『広辞苑はなぜ生まれたか　新村出の生きた軌跡』世界思想社、二〇一七年）

息子猛は学者であるとともに理想を求める革新的な社会運動家でもあったが、父出は静かで保守的な京都の文化人だった。戦後、嵯峨野高校の校歌、吉田幼稚園の園歌、紫明小学校の校歌は、出が作詞している。

共著者の平井美津子さんにはジェンダーを意識したテーマをお願いし、私は京都の民衆の歩みを記録することにした。私の専門分野は山本宣治をはじめとする近代日本社会運動史。近年は戦後史に関心が移行しているが、ここでもう一度京都の近現代を、現地を訪ねつつ書いてみることにした。「近代京都は近代日本社会運動の中心地でもあった。こうした史跡も必ず入れること。また近年の日韓関係、日中関係を踏まえ、韓国や中国に関係する史跡については意識的にとりあげること。耳塚など、韓国からの修学旅行先になっている史跡については、近現代史跡と位置づけるようにする」。これは出版社に送った出版趣意書である。

実は重山文庫の原稿が書きあげるまでに、「まえがき」が出来上がっていた。本書のねらいを私は次のように書いている。まず自分で枠を決め、締め切りを設定した上で、約二年間をかけて取り組んだのである。

本書で紹介する「観光コースでない京都」とは何

町衆のたたかいにいろどられる自治の町・京都

だろう。それは今までのガイドブックの「観光地京都」とはどう違うのだろうか。一つ目は、短期滞在型になる大多数の観光客には見えない、あるいは見つけることのできない京都を紹介することである。大型バスの入れない路地裏にも京都らしい雰囲気はたくさんあるし、小さな美術館・史料館がひっそり隠れるように開館している。

二つ目は、近代京都、現代京都を紹介していくことである。古都京都と呼ばれている景観が、実は近代京都の産物であったことは意外と知られていない。天皇の都だった京都は幕末に血なまぐさい政治の舞台として「復活」するが、その後近代天皇制確立期に都市として整備されていくことになる。平安神宮や時代祭など古都の「伝統」のルーツが近代にあったことを、読者の皆さんはどう受け止めるだろうか。

三つ目は、インバウンド（訪日外国人旅行）の激増によるオーバーツーリズム（観光公害）や、ホテル建設バブルなどで街壊しがすすむ現代の京都について、深く掘り下げて紹介していくことである。観光地として「見せる京都」が発展するなかで、見えない京都、見せたくない京都はどうなっているのかを考えてもらう素材を提供したい。京都は自治の町であり、京都の景観をめぐる運動の歴史は京都市民（町衆）の主体的なたたかいにいろどられていることを、少しでも知っていただければと思う。

新村出の付箋のついた『広辞苑』

今まで書いてきたので文章はそれなりに進んだのだが、写真撮影の方は編集者からのだめだしがあり、何度も撮りなおした。幸いだったのは、コロナ禍もあり、観光客がまったくいないなかで撮影ができたことである。近年の写真は肖像権もあり、人が写っていないものが求められる。北は舞鶴から南は加茂町まで、愛車や自転車に乗り、愛機ペンタックスを肩にかけ、シャッターを押し続けた。祇園菊水（大正時代から続くレストラン）を写そうとしたとき、一番いい撮影場所が四条河原町交差点中央部だと気づき、車で交差点に入り右折のウィンカーを出しながらシャッターを押したこともある。

編集後記

▼7月に亡くなった友人の加用文男・元京都教育大学教授の「子どもの『お馬鹿行動』研究序説」（2016年・かもがわ出版）を読み返す。草々、あるある、思い当たる節々。

▼故安倍晋三氏の「国葬儀」とエリザベス女王の国葬との「比較国葬儀研究序説」というのもなりたつのでは。ある全国紙の特別編集委員が、戦前の国葬で専制政治家・山縣有朋と民権派政治家・大隈重信との参列者の多寡の比較をしていた。イギリスのサッカー選手も体力勝負の葬儀行列にくわわっていたとか、日本では安倍派のジャーナリストで葬儀の招待状が来なかったとボヤく人や不倫で議員辞職に追い込まれたが案内があった人とか、まるで「サクラを見る会の葬儀」版的状況だ。

▼おとな社会でも、「子どもの『お馬鹿行動』研究序説」の延長線、その何十年後世界であることに思い至った、今日この頃である。（さとう）

京都の民主運動史を語る会

10月例会のご案内

とき　10月1日（土）14時～

ところ　京都市職員会館かもがわ
3F多目的教室
上京区河原町竹屋町東入 Tel075-256-1307

テーマ　景観論争の嚆矢・鴨東線問題
―新村出　生涯唯一の政治的活動

語る人　新村恭さん（新村出記念財団）

京都では景観、街づくり運動が盛り上がっています。かつて新村出氏も関わった街づくりの運動がありました。岩波書店退職後は京都市北区の新村出記念財団のお仕事、重山文庫の管理も兼ね、京都まで通っていらっしゃるお孫さんの恭さんに、新村出氏の知られざる戦後初期の街づくり運動について語って頂きます。＊マスクの着用をお願いします。
＊会員は参加費無料、会員外は資料代として300円。